Person & Person

ざっくばらん

書き文字の深さとコワさ

〝人柄〟〝丸見え〟

歌舞伎や演芸の看板でおなじみ…

寄席文字「橘流」名取 橘右橘さん

ワープロやパソコンの機械文字がはびこる中、一風変わった古き良き文字が、若い女性を中心に人気を集めている。歌舞伎座の前の看板や、祭りの提灯、さらに寄席の看板から相撲の番付などに描かれた由緒ある字体。一見、同じように見えてしまうこれらの文字も、ジッと見比べればその違いは歴然。「寄席文字「橘流」の名取で、カルチャースクールなどで教えている橘右橘さんに、古式豊かな文字の成り立ちや特徴などを聞いた。

「書く」より「描く」感覚

江戸に分類される、歌舞伎、芝居、歴史的に文字の発祥といわれる江戸時代に生まれたもの。相撲の世界のそれは相撲文字、そして現代の世界で用いられるのは寄席文字、提灯や千社札などの文字が江戸文字と称する。

歴史的に文字の発祥といわれる江戸時代に生まれたものが、発達・変化してきたものばかりだ。

書くというよりも、筆一本で描いていくという感覚が強いようで、上達のためには「絵心が大切」。そう指摘する橘さんも子供の頃からマンガが好きで、デザインに興味があったという。

中学生時代から見まねで寄席文字を書き写していたというから、子供としてはちょっと変わった子供だったのかもしれない。

「文字二十の時に師匠に弟子入りしたが、自己流でやっていたのはよくなかった。ってうってつけの思いました。筆法が違って知らず知らずのうちにクセが出ていたみたいですね」

それを一度白紙に戻して再学習し、昭和50年に名取となった。

「18年前師匠はどうなったんですが、名取が弟子を取るのを許さない主主死んじゃった、そういうわけで一門は新しい弟子を取る上でもたいんです」

そこで、橘さんは一門の組織を作り、総括として都内近郊で生徒を募り、教授している。

「文字からおじいちゃん主で、幅広いですね。女性も多い」というが、その主流層として挙げたのは、「文字は人なりですから」。

「筆は育てるもの」

面白は寄席文字用の筆と墨、特注の筆は、1万数千円はするという。

「筆は育てていくものっていう言い方をするんです。無駄な筆が抜けて、いいように動いてくれるようになるには3年ぐらいかかる」

文字を手入れも大会にと思ったら、そもそもの方は実にあっ

国立劇場、現在は上野鈴本演芸場の看板を担当。橘一門の主催する寄席文字教室のうち2カ所と、相撲流教室1カ所、江戸文字は4月から、日本テレビ文化センター柏で、教室を講師の主宰。

三遊亭小遊三さんが所属する大有企画の社長でもある。

「そ」主での人はいないですね」。

寄席文字の基本となるのは、漢数字の一から十、百、千まで。この中に、寄席文字の基本となる線作りはねなどが、まんべんなく含まれているという。それを完璧にマスターすれば理論上は書けるようになるが、そこは文字の持つ個性さ、芸術性としての文字は、その人個性を表現するもので、人柄が表れるという。

「文字は人なりですから」。

本式に、大きな紙に向かわないまで、筆に机の上にある普通のペンで寄席文字を書いたりと、何変ない筆者は欠かさない。

寄席文字の他にも行橋さんは、歌舞伎の幟、学校の名板をつとめ、江戸文字でも、最も歴史のある「東都桃札会」の主筆まで担当している。いわゆる、文字大王みたいな人なのだ。

「筆は「育てるもの」

「書く」より「描く」感覚

「人柄」「丸見え」

「寄席文字「橘流」名取 橘右橘さん

「歌舞伎や演芸の看板でおなじみ…」

「そ」主での人はいないですね」。

寄席文字の基本となるのは、漢数字の一から十、百、千まで。この中に、寄席文字の基本となる線作りはねなどが、まんべんなく含まれているという。それを完璧にマスターすれば理論上は書けるようになるが、そこは文字の持つ個性さ、芸術性としての文字は、その人個性を表現するもので、人柄が表れるという。

「文字は人なりですから」。

本式に、大きな紙に向かわないまで、筆に机の上にある普通のペンで寄席文字を書いたりと、何変ない筆者は欠かさない。

寄席文字の他にも行橋さんは、歌舞伎の幟、学校の名板をつとめ、江戸文字でも、最も歴史のある「東都桃札会」の主筆まで担当している。いわゆる、文字大王みたいな人なのだ。

▲「内外タイムス」を寄席文字で書くと、この通り。嬉い文字は人の縁はねはすべて内側に向け客を流さないことを意味する。右上がりは、尻上がりにのびることの意味

▼江戸文字　太田勝朝（大正14年刊『桃札諸名大鑑』より）

▼勘亭流　二代目荒井三禮（平成2年刊『正本勘亭流』より）

同じ「花」という文字でも、これだけの違いがある（江戸文字のしおりより）

▲寄席文字　橘右近（昭和53年刊『橘流』下巻より）

▲相撲字　木村容堂

プロフィル

たちばな・うきつ　本名中村泰二。昭和27年、東京・下谷稲荷町生まれ。昭和

第二百月、青山学院大学在学中に、寄席文字橘流家元橘右近に師事。昭和54年1月、橘右橘の名を許され、正式に一門入り。

同時に屋号の千社札会「東都桃札会」へ入会。江戸文字の勉強を本格的に始める。

昭和60年、歌舞伎座元、2代目荒井禮に師事。平成2年、歌舞伎の村三郎の名を許される。翌平成3年、歌舞伎座の幟の主筆に抜てきされる。同年4月、歌舞伎座の主筆に就任。荒井禮の主筆として、荒井禮の名を許される。

寄席文字では最長で、当時の

筆者・橘右橘

〈インタビュー〉渡辺　寧久
〈カメラ〉山内　猛